解放の神学　知っておきたいキリスト教のことば　(37)

解放の神学とは、1970 年代から 90 年代にかけてラテンアメリカの教会を中心におこった、実践神学を指します。カトリックの司祭である G. グティエレスなどによって提唱された神学で、福音を経済的・精神的・政治的・社会的な、あらゆる抑圧からの解放であると捉えます。

その考え方の神学的根拠は、旧約聖書にあるエジプトからの脱出や約束の地カナンでの土地取得、さらに大勢の預言者による権力の批判の箇所だとされます。さらに新約聖書においては、イエス様が長老や祭司といった権力を持つ人たちとの対決場面や、貧しい人を解放するという視点で神の国の福音を宣べ伝えている箇所が、その根拠と考えられています。

そしてラテンアメリカの教会を中心にして、これらの箇所のメッセージを「解放」という視点で学んでいく運動が起こったのです。

解放の神学はその後、他の地域でも成立していきます。例えばアジアではその迫害の体験をもとにした神学が生まれます。韓国の「民衆の神学」(徐南同)がその一例です。また南アフリカでは国内的な植民地問題、アメリカ合衆国においては「黒人神学」や、女性の解放のための「フェミニスト神学」などが発展していきます。

しかし一方で、わずかな聖書的根拠を拡大解釈して神学を展開しているという批判もあります。特に革命を正当化する根拠として聖書箇所を用いることに危険性もあることから、ヴァチカン教皇庁や神学者の中には、これらの運動を批判的に捉える動きもあるようです。

しかしながら解放の神学は、自分が現在置かれている立場で聖書を読み、解釈し、神学するということの大切さを教えてくれるものでもあるのです。

次回は「割礼」です。お楽しみに。